



來ル可キ條約改正ニ際スル國定稅率及ビ協定稅率如何(其二)

津村，秀松

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 7(3):329-349

(Issue Date)

1909-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051438>



來ル可キ條約改正ニ際スル國定稅率及ビ

協定稅率如何 (其二)

神戸高等商業學校教授

津 村 秀 松

四、

國定稅率ハ大體ニ於テ現狀維持シ、唯其稅目ヲ細分スルヲ以テ足レリトスコト
既說ノ如クナルガ、扱テ次ニ協定稅率ハ如何。來ル可キ條約改正ニ際シ、如何ナル稅
目ニ就キ、稅率ヲ協定ス可キカ。

惟フニ我國ノ輸出入貿易ハ近年漸ク其ノ相手方ヲ異ニセントスルノ傾向アリ
歐米諸國トノ間ニハ、輸入貿易次第ニ發達シ、東洋諸國トノ間ニハ、輸出貿易次第ニ
増加セントス。萬一此傾向ニシテ增長センニハ、歐米諸國トノ間ニ約定ス可キ協定
稅率ノ價值モ、今迄ノ如ク大ナラザル可キモ、是レ唯比較ノ論ニシテ、歐米諸國ニ對
スル輸出貿易モ亦決シテ退步セズ、時ト共ニ益々増進セントノ傾向アル可ク、又我

國貿易ノ現狀ヲ以テシテハ輸入ヲ防グヨリモ輸出ニ努ムルヲ以テ主義トナサル可カラズ。於是乎益々稅率協定ノ必要起ル也。

然ルニ東洋諸國トハ現行條約ノ如ク彼ヲシテ片務的協定稅率ヲ約セシメ我レノミ彼ニ對シテ最惠國ノ地位ニ立ツノ優レルアルニ如カザル可シ。勿論充分ノ希望ヲ云ヘバ東洋諸國ニ對スル我ガ貿易ノ前途ヤ甚ダ有望ニシテ而モ東洋諸國ヨリノ輸入品ハ多ク原料品又ハ食料品ナルニ我國ヨリノ輸出品ハ多ク製造品ナルガ故ニ彼此ノ間ニ互惠關稅ヲ約シ(英吉利ガ其ノ殖民地トノ間ニ又ハ北米合衆國ガ南米中米ノ諸國トノ間ニ現ニ存シ若シクハ將來益々實現セシメントスルガ如キ)我ハ彼レヨリノ輸入品ニ對シ特ニ低率ヲ課スルト同時ニ彼レヲシテ我ガ輸出品ニ對シ特別ノ減稅ヲ承諾セシメテ以テ唇齒輔車ノ關係ヲ造リ東洋諸國間ノ貿易關係ヲシテ東洋諸國ト西洋諸國トノ貿易關係以上ニ密接ナルモノタラシムルニアラン。サレド現今是等ノ東洋諸國ト西洋諸國トノ間ニハ無期限ニ最惠國條款ヲ約シ居ルヲ以テ獨リ我國ノミ特惠ノ地位ニ立ンコト望ム可クシテ行ハレ難シ故ニ之ハ後日ノ理想トシテ差シ當リハ現在ノ如ク是等ノ東洋諸國ニ對シ西洋諸

國ト同一ノ地位ニ立ツヲ以テ満足セザル可カラズ。果シテ然リトセバ、稅率ノ協定トイフモ、夫ハ唯現在ノ如ク、歐米諸國トノ間ノミナラン。

サレド現行條約ノ如ク、我レノミ稅率ヲ協定シ、彼レヲシテ之ニ應ズルノ稅率ヲ協定セシメ能ハザル所謂ル偏務的協定稅率制ハ、獨リ國權ヲ傷フモノタルノミナラズ、又國利ヲ損スルコト甚シキモノナリ。此ノ點ニ就テハ、曩ニ本誌ニ於テ、詳論スル所アリタレバ、今ハ之ヲ爾セザル可シ（本誌第一卷第三號、拙稿、現行條約ノ不備ト關稅定率法ノ改正參照）。

五、

サレバ今回ノ條約改正ニ際シ、今日ニ於テ豫メ講究ヲ要ス可キハ、如何ナル稅目ニ就キ、如何ナル稅率ニ於テ、互ニ關稅ヲ協定ス可キカノ問題是レ也。

凡ソ各國トノ談判ニ當テ、協定稅目竝ニ協定稅率ヲ選定スルニ、三種ノ法アリ曰ク

第一、彼我輸入品ノ輸入價額ヲ標準トスルモノ

第二、彼我輸入品ノ關稅減額ヲ標準トスルモノ

第三、彼我輸入品ノ性質ヲ標準トスルモノ

卽チ是レ也。第一法ハ毎年一定ノ金額以上ノ輸入額アル重要輸入品ニ就キ、互ニ稅率ヲ協定スルモノニシテ、例令ハ毎年輸入總額ノ約一割以上ヲ占ムル輸入品ニ就キ、互ニ稅率ヲ協定スルガ如シ。現行條約ニ於ケル英、佛、獨トノ協定稅目ノ如キモ、當時我國ニ是等ノ諸國ヨリ、五萬圓以上輸入額アリシモノヲ選ビタル次第ナレバ、偏務的ナレドモ、第一法ニ屬スルモノト謂フ可シ。此法ハ一見公平ナルガ如シト雖モ、現在ハ兎ニ角、將來有望ナル輸出品ニ就キ、稅率ノ協定ヲ見ル能ハザルト同時ニ、將來ハ兎ニ角、現在有力ナル輸入品ニ就キ、一々減稅ヲ甘ゼザルベカラザルガ故ニ、前進國ニハ有利ナレドモ、新進ノ工業國タル我國ノ如キニハ、至テ不利ナル方法ト謂フ可シ。第二法ハ協定ノ結果、彼此關稅收入額ニ及ス影響ノ均一ヲ標準トシテ、互ニ稅率ヲ協定スルモノニシテ、例令ハ甲國(農業國)ガ乙國(工業國)ニ向テ、自國輸出ノ原料品ニ對シ、乙國ノ輸入稅五分ナリシモノヲ、二分丈ケ減少セシメ、三分ニ協定シタルトシ、此輸出額千萬圓ナリト假定ス、次ニ乙國ハ甲國ニ向テ、之ガ對價トシテ自國輸出ノ製造品ニ對シ、甲國ノ輸入稅二割ナリシモノヲ、一割ニ減少セシメ、其輸出額

二百萬圓ナリトセバ、此場合兩國ハ關稅收入ニ於テ失フ所、孰レモ二十萬圓ナルガ故ニ、協定ニヨリ得喪スル彼此ノ利益ハ均一トナリヌ可シ。此ノ法ハ第一法ニ比シ一步ヲ進メタルモノナレドモ、兩國與ニ國庫收入主義ヲ採リ、其關稅ハ悉ク財政關稅ナル場合ナラバ兎ニ角、然ラズシテ内地產業保護ヲ目的トセル場合ニ於テハ、假令ヘ關稅收入減額ノ程度ニ於テ同一ナリトハ云ヘ、乙國ガ原料品ニ就テノ二分ノ減稅ト、甲國ガ製造品ニ就テノ一割ノ減稅トハ、決シテ同一價值若シクハ同一程度ノ犧牲トハ解シ難シ。殊ニ兩國ノ一方ニシテ、協定ノ際、有利ノ結果ヲ收メンガ爲メ豫メ必要以上ニ稅率ヲ引上ゲ置キ、割引ノ餘地ヲ造リ置クガ如キ場合(卽チ所謂 *Negotiation Tariff* ヲ設ケタル場合)ニハ、實際、甚ダ不公平ナル協定タルニ了ル可シ。孰レニモセヨ、方今我國ト相手協定國タル歐米諸國トノ間ノ貿易ハ、我ハ主トシテ原料品ヲ供シ、彼レハ主トシテ製造品ヲ供スルモノナルガ故ニ、單ニ關稅收入ノ減額ノ均一ヲ標準スル第二法ヲ採用ス可カラズ。結局我國今日ノ現狀ヲ以テシテハ、主トシテ第三法ニヨリ、彼此貿易品ノ性質ニ鑑ミテ、其將來ヲ察シ、之ニ第一法及ビ第二法ヲ加味シテ、以テ協定稅目竝ニ稅率ヲ決スルノ外策ナキ也。

六、

果シテ然ラバ、彼此輸入品ノ性質竝ニ現狀ニ鑑ミ、第一彼レヲシテ如何ナル稅目ニ就キ、協定ヲ肯ゼシム可キカ、(第二)之ニ對シ我ハ如何ナル稅目ニ就キ、協定ニ應ズ可キカ、ト云フニ、就レモ其數甚ダ少ナキ也。

先ヅ第一ノ問題ニ就テ考フルニ、現今我國ノ輸出重要品中、米國ニ對スルモノハ生絲、羽二重、茶、花蔴、陶磁器、樟腦、銅、眞田等ニシテ、原料品ハ約七割半製品一割ヲ占メ、此内、生絲、銅、茶ハ無稅品ニシテ、輸出總額ノ七割二分ニ當ル。英吉利ニ對スルモノハ、銅、羽二重、眞田、絹製手巾等ニシテ、原料品ハ約三割半製品四割五分ヲ占メ、悉皆無稅品ナリ、佛蘭西ニ對スルモノハ、生絲、生皮、苧、熨斗絲、銅、樟腦、羽二重等ニシテ、原料品ハ約七割半製品二割五分ヲ占メ、此内、生絲、生皮、苧、銅等ハ無稅品ニシテ、輸出總額ノ五割六分ニ當ル。獨逸ニ對スルモノハ、銅、羽二重、眞田、樟腦、魚油等ニシテ、原料品ハ四割半製品三割五分ヲ占メ、此内、銅、樟腦等ハ無稅品ニシテ、輸出總額ノ三割七分ニ當ル。伊太利ニ對スルモノハ、生絲、生皮、苧、熨斗絲、銅、珊瑚等ニシテ、原料品ハ約九割五分ヲ占メ、此内、生絲、珊瑚等ハ無稅品ニシテ、輸出總額ノ八割二分ニ當ル。由是觀之、方今我

國ヨリ歐米諸國ニ輸出スルモノハ

第一、通ジテ略ガ相類スルコト、

第二、大部分原料品ナルコト、

第三、大部分無稅品ナルコト、

ヲ發見セム、第一ノ結果、或ル一國ト協定センニハ、之ヲ標本トシテ、殘餘ノ諸國ニ協定ヲ迫ルヲ得可ク、殘餘ノ諸國モ他國ニ通路ヲ求メラル、ヲ恐レテ、容易ニ同一ノ協定ヲ肯ズ可ク、第二ノ結果、各國與ニ稅率輕減ノ却テ自國工業ニ有利ナルヲ悟ル可ク、之ヲ拒絕センニハ、競爭ノ地位ニアル工業國ニ漁夫ノ利ヲ占メラル、ヲ恐ルルナル可ク、第三ノ結果、歐米諸國ト稅率協定ヲ要ス可キ重要品ハ、僅カニ羽二重、花菱、陶磁器、眞田、魚油、等ノ數品ニ過ギザルガ故ニ、談判容易ナル可ク、之ニ對シテ我國ノ協定ニ應ズベキモノモ、亦數品ニテ事足ルベキ筈ナリ。勿論、此際注意ス可キハ、現在コソ我國ヨリノ重要輸出品ノ大部分ガ、無稅品ナレバトテ、何時、有稅品ト化スヤモ圖レザルヲ以テ、(註、一)是等現在無稅品タルモノニ就テモ、條約有效期間ハ其儘無稅品ニ據置ク可キ旨ヲ約定シ置クノ必要アルコト是レ也。之ヲ要スルニ、現今我

國ヨリノ重要輸出品ノ大部分ガ原料品ニシテ、又無稅品ナルガ上ニ各國ヲ通ジテ品種略ポ一定セルノ三事實ガ相合シテ我國ノ要求ヲ過大ナラシメザルガ故ニ無事ニ稅率協定ヲ見ルコト左程困難ニアラザル可シ。サレド之ヲ困難ナラシメザルト否トハ、又之ニ對シテ我國ノ酬ユル所ノ協定稅目竝ニ稅率ノ如何ニ存スルガ故ニ、次ニ第二ノ問題ヲ研究セン。

註一、從來、國ニ於テハ、我國ヨリノ羽二重ヲ全然無稅品トシテ取扱ヒタルニ、前年、突然、其ノ内ノ練羽二重ニ限り、百「キロ」ニ付キ九百法ノ區別關稅ヲ課スルニ至リタルガ如キ、又米國ニ於テハ、我國ヨリ製茶ノ無稅輸入ヲ許シ居レド、嘗テ米西戰爭ノ際、軍費補助ノ必要上、明治三十一年六月一日ヨリ、同三十五年十二月三十一日迄、四箇年半ニ亘リ、一封度十仙ノ輸入稅ヲ課シテ、我國ヲ苦シメタルガ如キ、其後、本年春、關稅改正ノ討議ニ際シ、再ビ一封度八仙ノ製茶課稅案、同國ノ代議院ニ提出セラレタルガ如キ、之ハ幸ニ否決セラレタレドモ、同國ノ政策トシテ、南米諸國ノ甘心ヲ買フノ必要上、珈琲ノ勁敵タル製茶ニ課稅セントスルコトハ、此後ニ於テモ、豫期セザルベカラザル所ナルガ故ニ、現在無稅品ナリトテ、決シテ安心スベカラズ。出來得可キ限り、條約ニ於テ、條約有効期間、其ノ無稅品タルコトヲ約定セシメ置カザル可カラズ。

七、

我國ガ歐米諸國ニ對シ、稅率ノ協定ヲ肯ズルニ當テ、先ヅ第一ニ決定シ置ク可キハ互惠主義ヲ採ル可キカ、最惠主義ヲ採ル可キカ、從來ノ如ク最惠主義ヲ採ルトセバ、無條件最惠國條款主義ヲ採ル可キカ、條件付最惠國條款主義ヲ採ル可キカノ間、

題卽チ是レ也。是等二主義其ノ孰レヲ採ルカニヨリ、自カラ協定稅率ノ範圍竝ニ其影響ヲ異ニス可シ。一切ノ諸國ニ對シ、一切互惠主義若シクハ條件付最惠國條款主義ヲ採ルトセバ、相手條約國トノ貿易關係ニ應ジテ、我ガ協定稅率ノ範圍竝ニ程度ヲ大ニスルモ、差支無キハ勿論、却テ有利ナル場合多ケレド、之ニ反シ、無條件最惠國條款主義ヲ採ルトセバ、我ガ協定稅目ノ選擇竝ニ協定稅率ノ約定ニ關シ、充分慎重ノ態度ニ出ザルベカラズ。孰レニモセヨ、來ル可キ條約改正ニ際シ、我國ハ單純ナル國定稅率制ヲ採ル能ハザルコト、前述ノ如クナルヲ以テ、今ヨリ稅率協定ノ覺悟アルヲ要ス可ク、已ニ之レアルヲ要ストセバ、如何ナル稅目ニ就キ、之ヲ諾ス可キヤヲ研究シ置カザル可カラズ。

現行條約ニ於テ、我國ハ英吉利ト六十四種、獨逸ト五十九種、佛蘭西ト三十九種ノ稅目ニ就キ、片務的協定稅率ヲ約セル次第ナルガ、中ニハ重要ナラザル稅目モアレド、又甚ダ重要ナル稅目ニ就キ、非常ニ低率ナル協定ヲナシ、爲メニ過去十年間我國ノ工業ノ發達ト、財政ノ整理トヲ妨ゲタルモノアル也。

今、現行關稅定率法ニ於ケル國定稅率ト、現行條約ニ於ケル協定稅率トノ關係ヲ

見ルニ、現下我國ニ於ケル輸入重要品二十種中、線綿、羊毛、苧麻、豆糟ノ如キ原料品ハ
無稅品ナレバ、之ヲ除キ、殘リ十六稅ノ重要有稅品中、

第一、協定稅率アルモノ、

國定稅率

協定稅率

一、乾藍(人造)

二・〇

一・〇

二、アニリン染料

二・〇

一・〇

三、窓玻璃

無色ノモノ

一・〇 一・二・〇

〇・八

有色ノモノ

三・〇

一・〇

四、鐵及鋼

塊

〇・七五

〇・五

條及竿

二・五

〇・七五

釘

二・〇 一・二・五

一・〇

板

二・五

〇・七五

軌條

二・五

〇・五

五、電線

二・五

〇・五

六、印刷料紙

一・五

一・〇

七、精糖

五・〇

一・〇

八、生金巾

三・〇

一・〇

九、羅紗

三・〇

一・〇

十、縮緬吳呂

三・〇

一・〇

十一、機械

二・〇—五・〇

〇・五

十二、熟皮

二・〇

一・五

第二、協定稅率ナキモノ

十三、米

一・五

十四、麥粉

三・〇

十五、石油

五・〇

十六、粗糖

四・〇

ナリトス。由是觀之、現今我國ニ於ケル輸入重要品中、大部分ハ偏務的協定稅率ノ束縛ヲ被ムレルモノニシテ、殊ニ明治三十九年ノ關稅定率法改正以來、國定稅率ト協定稅率トノ間ニ甚シキ差率ヲ現ハシ、機械ノ如キハ四倍乃至十倍、精糖、軌條、電線ノ如キハ五倍、條鐵、竿鐵、板鐵等ノ如キハ三倍三分、生金巾、羅紗、縮緬吳呂、窓玻璃ノ如キハ三倍、其他ノモノト雖モ、大概二倍乃至三倍ノ増率トナレリ。然ルニ是等ノ物品ハ殆シド全部協定國、若クハ之ニ均霑シ得可キ最惠國ヨリ輸入スルモノナルヲ以テ此ノ如キ國定稅率ノ引上モ、之ヲ適用ス可キ場合無キヨリ、之ニ依テ何等増收入ヲ得ルニ由無シ。此ノ結果、爾來戰爭等ニヨリ増收入ノ必要起ル毎ニ、内地消費稅ヲ引

上ゲテ以テ協定稅率ヲ嵩ムルカ、若シクハ協定稅率ナキ物品ニ向テ輸入稅ヲ誅求スルノ不得止ニ至レル跡ヲ見ル。砂糖消費稅増徴ノ如キ前者ノ適例ニシテ非常特別稅法中ノ輸入稅引上ノ如キ後者ノ適例ナリ。殊ニ米穀ニ對スル一割五分ノ輸入稅ノ如キ、政府ニ於テ充分ニ其ノ弊害ヲ認メナガラモ、尙ホ議會ノ修正ニ屈シテ永久稅ト改メタリシハ、明カニ增收ノ必要ニ迫ラレタルモノト見ルヲ得可シ。斯クテ我ガ政府ハ年々歲計ノ膨脹ニ伴フ增收ノ必要ニ迫ラレ、増率又増率ヲ敢テシ、終ニ無慮五百ノ稅目ニ亘テ、平均三割ノ高稅ヲ課シナガラ、尙ホ其ノ關稅收入ハ、明治四十年度ニ於テ三千六百餘萬圓ニシテ、歲入總額ノ五分九厘ニ當ルニ過ギズ。之ヲ米國ノ關稅收入ノ六億圓ニシテ、歲入總額ノ五割二分七厘ニ當リ獨逸ノ關稅收入ノ四億三千萬圓ニシテ、歲入總額ノ三割七分八厘ニ當リ、英吉利ノ關稅收入三億四千萬圓ニシテ、歲入總額ノ二割四分ニ當ルニ比セバ、非常ナル相違ト稱ス可シ。是レ全ク輸入額ノ大部分ヲ占ムル輸入重要品ニ就キ、一々協定稅率ノ束縛ヲ被ムレルガ爲メ、勢ヒ重要ナラザル輸入品ニ對シテ迄モ、一々輸入稅ヲ徵シ、輸入稅率ヲ引上タルニモ拘ラズ、尙ホ全體ニ於テ關稅收入ノ僅少ナルニ至レル也。故ニ來ル可キ條約

改正ニ際シ、財政上ノ理由ヨリ、此上更ニ國定稅率ノ引上ヲ圖ラサルモ、協定稅目ノ選擇ト、協定稅率ノ約定トダニ注意センニハ、關稅收入ノ偉大ナル増加ヲ見ルナル可シ。

關稅收入ノ少キハ尙ホ可ナリトスルモ、今日我國ニ於テ是非共其ノ發達ヲ見ザル可カラザルモノハ、工業ニシテ、就中、製鐵業、製鋼業、機械工業、化學工業、毛織物業、織布業、製紙業、製革業、玻璃業等ナルニ、斯ル工業ノ製品ニ就キ、五分乃至一割ノ低率ヲ協定セル爲メ、今尙ホ勃興ノ機運ニ達セザルハ、遺憾ナリ之ヲ以テ、現行條約ノ下ニ於テハ、我國ハ保護貿易主義ヲモ採用スル能ハズサリトテ、又國庫收入主義ヲモ採用スル能ハズ、國庫ノ收入僅少ナルト同時ニ、産業上ノ勃興ヲモ期待スル能ハズ、經濟上、財政上、合セテ以テ、我國ヲシテ死地ニ陷ラシムルモノハ、寔ニ現在ノ協定稅率ニ在リト評スルモ、必ズシモ過言ニアラザル可シ。

之レ故ニ我國ハ此後モ尙ホ國定協定稅率制ヲ採用ス可ク、從テ稅率協定ノ必要ハアレド、其ノ稅目ノ選擇竝ニ稅率ノ約定ニ就テハ、充分ニ慎重ノ態度ヲ採リ、禍ヲ再セザルノ覺悟アルヲ要ス、幸ニ我國ノ輸出貿易ノ現狀ハ、多クノ稅率協定ヲ要求

スル必要ヲ見ズ、前述ノ如ク、現在ノ輸出重要品中、稅率協定ノ必要アルハ、僅カニ羽二重、花菱、陶磁器、眞田、魚油等ノ數品ニ過ギズ。從テ之ニ對シテ我國ノ承諾ス可キ協定稅目モ、多キヲ要セザラン。協定稅目ニシテ多カラザランニハ、現在ノ如ク、經濟上財政上、不利ノ地位ニ立ツノ心配モ少キ道理ナリ。勿論、現在ノ協定稅目ノ如キハ、我レニ取テ不利ナルモノナル丈ク、相手ニ取テ有利ナルモノナル可ケレバ、相手ハ成ル可ク之ヲ維持セント努ムルナランモ、相手ノ諸國ニシテ雙務的協定稅率主義ヲ採用スルノ誠意ナケレバ、則チ止ム、苟モ之レアル以上ハ、我レノ求ムル所少キニ對シテ、相手モ亦其ノ求ムル所ヲ減少セザルベカラザル道理ナリ。且ツ夫レ彼此ノ貿易狀態ハ、爾來著シク變遷シテ、重要貿易品ノ如キモ、亦全ク昔日ノ如キニアラザルガ故ニ、妥協ノ餘地ヲ外ニ求ムルコト、必ズシモ困難ニアラザル可シ。

八、

然ラバ來ル可キ條約改正ニ際シ、稅率協定ノ目的物タル可キ見込アル輸入重要品如何。之ニ就テハ、我國ノ側ヨリ云ヘバ、主トシテ經濟上及ビ財政上ノ關係如何ヨリ選定ス可キモ、相手諸外國ノ側ヨリ云ヘバ、主トシテ、現在並ニ將來ニ於ケル輸入

額ノ大小如何ヨリ、選定ス可シ、故ニ經濟上及ビ財政上ノ關係ハ暫ク之ヲ措キ、單ニ相手ヨリ見テ稅率協定ノ儀ニ上ル可シト思ハル、獨米、佛、伊、加奈陀、埃甸、露ノ七箇國ヨリノ重要輸入品中、夫等ノ國ヨリ最近五箇年平均輸入額ガ、本邦輸入總額ノ五割以上ヲ占ムルモノヲ標準トシ、獨米ニアリテハ、一箇年平均輸入額十萬圓以上、加奈陀、埃甸ニアツテハ五萬圓以上、伊ハ一萬圓以上、露ハ一千圓以上ニ達スル輸入品ノミヲ選出センニ、左ノ如キモノアル可シ。

(一) 獨逸

明治三十九年度獨逸ヨリノ總輸入額

內主要輸入品輸入總額

四二、四六五
一五、七〇七

總輸入額八割以上ガ獨逸ヨリ輸入セラル、モノ

品名	品名	自明治三十九年度至明治四十六年度平均輸入額		自明治三十九年度至明治四十六年度平均輸入額	
		本邦五箇年平均輸入額ニ對スル割合	明治三十九年度獨逸ヨリノ輸入額	本邦五箇年平均輸入額ニ對スル割合	明治三十九年度獨逸ヨリノ輸入額
セルロイド	亞鉛(板)	三五九	七八一	九割九分	一、〇〇二
ザルチルサン	次硝酸荳鉛	一〇〇	二四六	八割	二七六
苦草	人造藍	一六二	二、五八九	九割三分	三、八七九
アニリン染料	アリザリン染料	一、五六五	一九二	九割六分	一二五
毛フランチネル	顯微鏡及同部分品	二二〇	一一七	八割六分	一八〇
		八割七分	二八二		

第七卷 (三四四) 論說

來ル可キ條約改正ニ際スル國定稅率
及ビ協定稅率如何

第三號

(四〇)

計 十品

六、三三一

八、八五一

總輸入額五割以上ガ獨逸ヨリ輸入セラル、モノ

織物用毛絲	一、一五八 ^{千円}	六割一分	一、〇三三 ^{千円}	パ ル ブ	五六四 ^{千円}	六割六分	一、二七七 ^{千円}
麥 芽	二四八	五割一分	三〇九	亞 鉛(塊錠)	四四〇	五割三分	二七八
醋 酸	一一七	五割五分	二一六	石 炭	一五八	六割一分	一三九
アンチピリン	一〇〇	七割七分	六七	酒 精	二二七	七割三分	一五四
藥劑及製藥	一、一六〇	五割七分	一、二五九	鉛 筆	二八八	七割八分	三六五
綿フランネル	三二一	五割四分	五二三	織 釘	一、三五五	五割五分	一、二三六
計 十二品	六、一三六		六、八五六				
通 計	一二、四六七		一五、七〇七				

(二) 北米合衆國

明治三十九年度米國ヨリノ總輸入額

内主要輸入品輸入總額

六九、九二〇^{千円}
二七、七一五

總輸入額八割以上ガ米國ヨリ輸入セラル、モノ

小 麥 粉	八、五七二 ^{千円}	九割七分	七、九二四 ^{千円}	ミネラル、ゴルザ油	一一八 ^{千円}	九割二分	二二七 ^{千円}
機械油及重油	六〇〇	九割六分	八一	葉 煙 草	一、三〇六	九割五分	一、四一五
綿 帆 布	五四一	九 割	九四	靴 底 皮	二、六五三	八割九分	一、〇八〇
板 紙	二七七	八割七分	三〇〇				
計 七品	一四、〇六七		一一、八五一				

總輸入額五割以上ガ米國ヨリ輸入セラル、モノ

小麥	一、七五六 ^{千円}	五割七分	一、一六三 ^{千円}	煉乳	八〇八 ^{千円}	五割五分	八七二 ^{千円}
石油	八、九三六	六割六分	九、五五六	パラフィン蠟	七七四	六割	一、三七九
鉛 (塊錠)	四九七	五割	六三八	電氣鐵道車部分品	三五九	七割七分	二五七
懷中時計側	二五二	五割四分	六一一	旋盤	六三五	五割	四二七
製紙機	二三三	五割六分	二一九	縫衣機	三一七	六割四分	二八五
丸材及角材	二二八	七割二分	二二二	坑業機械	一四五	五割七分	一四一
水銀	一四四	五割八分	八四				
計 十三品	一五、〇八四		一五、八六四				
通計	二九、一五一		二七、七一五				

(三) 佛 蘭 西

明治三十九年佛國ヨリノ總輸入額
内主要輸入品輸入總額

四、九九四^{千円}
一、〇四九

總輸入額八割以上ガ佛國ヨリ輸入セラル、モノ

雙眼鏡	一〇九 ^{千円}	九割六分	五八 ^{千円}	シヤンパン	一四三 ^{千円}	九割	二〇七 ^{千円}
計 二品	二五二		二六五				

總輸入額五割以上ガ佛國ヨリ輸入セラル、モノ

ロクウード越幾斯	一一一 ^{千円}	七割九分	一〇八 ^{千円}	煙草用紙	一六九 ^{千円}	五割六分	一〇三 ^{千円}
葡萄酒	二三五	五割七分	二八九	薰香類	二四五	六割二分	二八四

來ル可キ條約改正ニ際スル國定稅率
及ビ協定稅率如何

第七卷 (三四六)

論說

來ル可キ條約改正ニ際ヘル國定稅率
及ビ協定稅率如何

第三號

(四二)

計 四品

七六〇

通 計

一、〇二二

(參照)

モ ス リ ン

一、〇二八

四割三分

六一一

(四) 伊 太 利

明治三十九年度伊太利ヨリノ總輸入額

內主要輸入品

ナ シ 六三五

(參照)

フ エ ル ト 製 帽 子

九八

二割一分

一五五

フ エ ル ト 製 帽 體

四七

五

(五) 加 奈 陀

明治三十九年度加奈陀ヨリノ總輸入額

內主要輸入品

ナ シ 一、〇〇一

(參照)

鹽 鮭 及 鱒

三二

二割九分

四〇八

鉛

(塊錠)

一〇一

一 割

一七〇

木 材 及 板

一一〇

八 分

六九

麥

粉

一八五

二 分

一六四

(六) 奧 匈 國

明治三十九年度奧匈國ヨリノ總輸入額

內主要輸入品輸入總額

二、七六五 三五九

總輸入額五割以上ガ奧匈國ヨリ輸入セラル、モノ

模造鳥子紙

二〇五^{千円}

六割七分

三五九^{千円}

(參照)

麥芽

一七九^{千円}

三割七分

三一〇^{千円}

筆記用紙

八九^{千円}

三割二分

一七三^{千円}

マツチ用紙

八六

二割五分

一六五

煙草用紙

八一

二割六分

六二

模造日本紙

一九三

二割二分

二三一

(七) 露 西 亞

明治三十九年度露西亞ヨリノ總輸入額

四一^{千円}

内主要輸入品

ナシ

(參照)

石油(高加索產)

二、四二五^{千円}

一割八分

一九〇^{千円}

精

糖

四三二^{千円}

一割三分

ナシ

勿論、如何ナル税目ニ就キ、如何ナル協定税率ヲ見ル可キカハ、事全ク談判ノ成行
キ次第ニヨルモノニシテ、豫メ之ヲ確定スル能ハザル所ナレドモ、前表所掲ノ諸品
ノ如キハ税率協定ノ目的物タルニ至ルニ庶幾キモノナリ。サレバ是等諸品ニ關係
アル我國ノ當業者タルモノ、此際十分慎重ニ其ノ影響スル所ヲ研究シ開陳シテ以
テ、豫メ當局者ノ談判ニ際スル有力ナル參考ニ資セザルベカラズ。由來我國ノ實業
家ナルモノハ、萬事事前ニ於テ云爲スル所ナクシテ、萬事事後ニ於テ不平ヲ唱フ。是
レ自暴自棄ナリ、今回ノ條約改正ニ際シテ、斯ル態度ヲ改メ、各々其業ニ關スル所ニ

就キ、充分ニ調査ヲ重ネテ以テ、盛ニ所見ヲ天下ニ告白センコト、邦國ノ爲メ切望ニ堪ヘズ。依テ豫メ稅率協定ノ見込アルモノヲ掲ゲテ以テ、當事者ニ警告ヲ與フル次第也。

九、

惟フニ今回ノ條約改正ニ際シ、我國ニシテ稅率協定ノ誠意アル以上ハ、相手ヲシテ讓歩セシムルト同時ニ、我モ亦讓歩スル所ナカルベカラズ。要ハ讓歩ス可キノ稅目(即チ協定ス可キノ稅目)ヲ選擇スルニ當テ、之ヲ我國ノ國情ニ鑑ミ、將來容易ニ發達ノ見込アルモノヲ保留シ、然ラザルモノヲ提供ス可キノミ。此點ヨリ觀察スルトキハ、從來我國人ノ技能ニ適セル織緯工業、將來我國ニ勃興ノ見込アル化學工業ハ之ヲ保留シ、燃料(コークス)原料ノ不足ナル上ヨリ云フモ、經驗技術ノ困難ナル上ヨリ云フモ、更ニ一面ニ於テ製造品タレド、他面ニ於テ他工業ノ原料若シクハ材料タル上ヨリ云フモ、容易ニ發達ノ見込ナク、又無暗ニ重稅ヲ課ス可カラザル鐵工業竝ニ機械工業ニ於テ、暫ク讓歩スル所アルハ、適當ナル處置ナリト謂フ可シ。

斯クテ今回我國ノ採用ス可キ協定稅率ノ大綱定レルガ、更ニ細目ニ就テ論ゼン

ニ、今回ノ稅率協定ニ際シ、第一ニ準據ス可キ方針ハ、成ル可ク、各國ニ通ジタル稅目ニ就キ、各國トノ協定ヲ肯ズ可キコト也。鐵、鋼、機械ノ類、此ノ目的ニ適フ。斯クセバ各國ニ就テ許ス所ノ協定稅目多キモ、全體ニ於テ定ムル所ノ協定稅目少キノ利益アラシ。勿論、相手ノ各國ヨリ云エバ、既ニ其ノ内ノ一國カ、我國ト協定セル稅目ハ當然之ニ均霑シ得可ケレド、我レニ於テ更ニ一層ノ減率ヲ承諾セザル限り、別ニ協定ノ必要ヲ見ザル可シ。故ニ之ヲ避ケテ、特種ノ稅目ニ就キ、協定ヲ要求スルナル可シ。依テ第二ニ準據ス可キ方針ハ、特種ノ稅目ニ就キ、協定スルハ、我國モ亦協定セシム可キ必要ヲ見ル。特種ノ稅目アル場合ニ限ル可シ。例令バ、米國トハ小麥粉ト花莖、葉煙草ト陶磁器、獨逸トハ人造藍ト魚油「バルブ」ト眞田、佛蘭西トハ葡萄酒ト練羽二重ニ就キ、互ニ協定稅率ヲ約スルガ如シ。斯クセバ最惠國條款ニヨル稅率均霑ノ被害ヲ減少スルヲ得テ、互ニ特別ノ利益ニ浴スルヲ得可シ。(完結)